



ラジオ小説はなぜ増えているのか

村上謙三久（編集者・ライター）

近年、ラジオやポッドキャストを題材にした小説が相次いで刊行されている。なぜ今、「声」と「リスナー」の物語が人々を引きつけるのか。『いつものラジオ リスナーに聞いた16の話』など、ラジオに関する著作も多い村上謙三久が、オススメのラジオ本を紹介する。

ラジオが持つ魅力が際立ち、人を引きつけるようになってきているのかもしれない。ラジオ小説が増えたきっかけとも言える作品が佐藤多佳子さんの『明るい夜に出かけて』だ。今号の表紙を飾った漫画『さむわんへるつ』において主人公たちが聴いているラジオ番組『ロングホープズの月曜ミッドナイトトークキング』はお笑いコンビ・アルコ&ピースのラジオがモデルになっていることで有名だが、『明るい夜に出かけて』は実際に放送されていた『アルコ&ピースのオールナイトニッポン』のリスナーたちが主人公の物語だ。

2013年から3年間放送されていた番組の1年間を切り取り、実際にオンエアされた内容や当時のラジオ界の状況、アルコ&ピースの立ち位置などが物語とリンクしている。

ある事件をきっかけに、大学を休学し、深夜のコンビニエンスストアでバイトをしながら一人暮らしを始めた富山。ラジオへの投稿もやめたものの、完全には離れられず、別のラジオネームで密かに送るようになる。そんな時、女子高生のハガキ職人、ラジオネーム・虹色ギャランドウと出会う。若い深夜ラジオリスナーが陥りがちな自意識と自己嫌悪の最中で、主人公はもがき続ける。それでも仲間たちとそれぞれの

実際のラジオ番組が登場する小説

形は違えども同じ言葉が扱っているからか、ラジオと本とはとにかく相性がいい。古くから現在に至るまで番組本やコーナー本は多数発売さ



『明るい夜に出かけて』
佐藤多佳子 新潮文庫
第30回山本周五郎賞受賞作。実際にニッポン放送で放送されていた『アルコ&ピースのオールナイトニッポン』シリーズを聴く若者たちの交流と葛藤を描いた青春小説。他の実在する番組も多数登場する。ラジオドラマ化、舞台化もされた。

「明るい夜」を探していく。

同じパーソナリティから生まれた、同じハガキ職人たちが主人公の小説で、男女のリスナーが出会うところまで『さむわんへるつ』と一緒に、『明るい夜に出かけて』がまとう空気感は大きく違う。とにかく生々しくて、青春の鬱積した思いが詰まっている。

『姉妹作品』と言うには無理があるかもしれないが、『さむわんへるつ』読者にもぜひ読んでほしい一冊だ。雰囲気や物語の展開も違うし、2010年代と2020年代のラジオが持つ空気感の差も強く表れているが、芯にある伝えたいことはまったく同じような気もする。

実際の番組を取り扱っている小説は他にもある。原田ひ香さんの『ラジオ・ガガガ』は、様々な番組のリスナーたちに焦点を当てた短編集。『伊集院光 深夜の馬鹿力』『ナインティナインの



『ラジオ・ガガガ』
原田ひ香 双葉文庫
実在するラジオ番組を聴くリスナーたちを描いた短編集。本文で触れた3番組のほか、『全国こども電話相談室・リアル!』『FMシアター』も取り上げられている。最後に収録されている「音にならないラジオ」はラジオドラマの脚本家が主人公。

『オールナイトニッポン』のオールナイトニッポン』など現在も放送されている番組がそれぞれのストーリーに関わってくる。息子たちに心配されながらケアハウスで生活する老女、海外での事業が上手くいかずシンガポールからマレーシアへと逃げ出した30代の男、悩みを抱える夫を心配している主婦……。それぞれの立場でラジオを聴き、心の中でちょっとした変化が起こる。

今の時代らしい距離感のラジオ小説

『オールナイトニッポン』に立ち上げから関わり、現在も構成作家として番組に参加している放送作家といえば藤井青銅さん。ラジオドラマの脚本家として1979年にデビューし、今もなおラジオに関わり続けている生き字引的な存在で、おそらくラジオに関連する書籍を最も手掛けている作家ではないだろうか。そんな藤井さんによるラジオ小説が『黄昏ラジオ』だ。

架空のラジオ局・ラジオ東洋を舞台にした連作短編集なのだが、どこに発表するでもなく20年以上前から少しずつ書きためていたようだ。ご本人曰くデビューからずっとラジオ界に「潜入取材」をしていたような感覚になったらしい。放送局が舞台ならば、パーソナリティが主役になりそうなものだが、この本は裏方中心。新人リポーターや放送作家、ディレクターのみな